

---

# 午前霊時の夢物語

伝次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

午前霊時の夢物語

### 【Nコード】

N1349Q

### 【作者名】

伝次郎

### 【あらすじ】

マンションの一室で、恋人、有里子と同棲中の俺だが、原因が分からないまま彼女が突然家出した。友人、坂藤一也と飲みながら愚痴をこぼす。話は金縛りのことになり、幽霊が出るか出ないかということに。また、このマンションにこそ泥が出没しているという。そしてなぜか俺が容疑者として警察に連行された。しかし、俺の部屋にあるときから現われた酒好きの可愛い女の幽霊に助けられる。そこから奇妙な二人の関係のまま、こそどろの犯人探しが始まった。

## その一

### (一)

ベッドの中で、ただぼんやりと天井を見つめていた。

照明は消され、賑やかに瞬いていたテレビは、タイマーによって強制的にその輝きを失っている。

午前二時を過ぎたこの時間、いつもであれば、今ごろ夢劇場の幕開けを見ているところだろう。

眠くないわけではないが、何となく寝付けない。それは、さつきまでこの部屋で一緒に飲んでいた坂藤一也の話が気になっていたからかもしれない。

全く妙なことを聞かされたものだ……。

俺の名前は西野啓介、二十四歳。この1LDKのマンションに、一人寂しく住んでいる。いや、現在は、と言わなくてはならないだろう。つい最近まで、二歳年下の恋人、有里子と同棲していたのだが、それが突然、何の連絡もなしに有里子の姿が消えてしまったのである。

洋服や荷物はそのまま残っている。喧嘩したわけでもないし、家出したとは考えにくい。

「他に男でも作ったんじゃないか？」

一也は呑気に言っていたが、その実、本気で心配してくれているのだ。

「まさか……。でも、そうだとすると、荷物残して出て行くか？」

「荷物だったって、ほとんど洋服だけだろ。金や通帳が残っていたとしても、青年実業家みたいな男だったら、何不自由なく――」

「やめろ！ いい加減にしてくれ」

俺はつい怒鳴っていた。

「冗談に決まってるだろ。どうしたんだよ啓介、お前らしくない」

一也は笑いながら、俺のために焼酎の水割りを作ってくれた。

俺だつて心配したよ、そんなことぐらい。いくら結婚の約束をしたからって、まだ二十二歳の女盛りなんだ。安月給の俺なんかより、もつと金持ちでイケメンの男の方がいいだろう。有里子の友達だつてチャラチャラしたのばかりだし、遊びに行けば男たちが群がってくる。「魔が差す」ことだつて……。

いや、そんなことはない。有里子は必ず帰ってくる——と、俺はかたくなに信じていた。

何が気になつたかというと、一也が突然、

「お前、金縛りになつたことあるか？」

と、訊いてきたからだつた。

「聞いたことあるけど、そんなもん、気のせいだろ。身体が疲れてるだけだよ」

その手の話しに取り合う気はなかったが、いつになく一也の表情が違う。

「それがさ、最近、取り憑かれたみたいなんだ。女の幽霊に」

おとぎ話ではなく、実話として、一也は淡々と話し始めた。

——眠っているのか現実なのか、布団の中で浮かんでいるような感覚にとらわれる。そして、足先から痺れが走って来るというのだ。気がつくと、まるで身体を針金で縛られたような硬直した状態になつて、手足を動かすどころか声さえも出せないという。

といった経験は、今まで何度もあったらしい。ところが最近、金縛りの真つ最中、目を開けてみたところが……。部屋の空間に、見ず知らずの髪の毛の長い女が浮かんでいた。まるで映画でも観ているように、その姿は青白く、下半身は薄っすらとして消えかかっている。細い両手は柳のように垂れて、ゆっくりと「おいでおいで」をして……。

「やめろ、夢の話は聞きたくない！」

遊園地のお化け屋敷にだつて入れないほど、俺は幽霊恐怖症なの

だ。しかし顔を伏せながらも、耳だけは一也から離れない。

「それが、美人なんだよ、びっくりするくらい。幽霊でもいい、と思うくらいにね」

一也は続けた。身体は依然として動かない。それどころか宙に浮き上がって来て、目の前の女に少しずつ近づいている。恐怖感と不思議な快樂が混同する中、女の唇が一也の耳元に触れた。そして小さな声で囁いた。

「食いたい……あなたを、食いたい……」

その瞬間、ゴムが弾けるように、一也の身体が布団の上で弾けたという。気がつけば、荒い息づかいで飛び起きていたのだった。

「あれから、毎晩のように出て来るんだ。でも、耳元で囁くところまで。最初は怖かったけど、今では俺の方から会いたいくらいだよ」  
どうやらそれが快感になっているらしい。

「本当に喰われたらどうするんだよ」

「そんなことあるわけないさ。所詮、幻なんだから」

一也は笑って、「でも、あの女なら喰われてもいいかな」

と言ったのだった。

信じられない。幽霊に惚れたとでもいうのか？ バカらしい……。

「啓介も経験してみろよ。もしかしたら彼女が出てくるかも……」

「不吉なことを言うな。有里子は死んだわけじゃないんだぞ」

「だから、幽霊だったら霊能力があるだろ。彼女の居場所、知ってるかもしれないじゃないか。訊いてみるんだよ」

それも面白いね、と俺は言って、すぐに話題を変えた。いや、話を戻したのだ。

今問題になっていること。それは、最近このマンションに空き巣が出没しているということである。俺の部屋には何も盗まれるようなものはないが、他の部屋ではかなりの被害が出ているらしい。

管理人に聞いた話では、警察が常時張り込んでいるという。犯人は身近なところにいる、という噂があったからだ。しかもこのマンションの住人が怪しいと……。

「早く自首しろ。今なら刑が軽くなるかも」

と、一也が言った。

「いい加減にしろ」

いろんな話しがごちゃ混ぜになって、男二人の会話は深夜まで続いたのだった……。

酔ったせいも手伝ってか、俺はしだいに眠りにつこうとしていた。今日は一日中蒸し暑く、夜になってもなかなか気温は下がってくれない。しかしこう何日も熱帯夜が続くと、やはりクーラーはフル稼働させなければならぬ。

しかし電気代はもったいないし、身体にだって良くはない。取りあえずタイマーをセットして……。

いつの間にかクーラーの低い振動は止まっている。そして、部屋の温度は少しずつ上昇していた。

暑い……。

薄れかかった意識の中で、俺は何か感じ始めていた。身体が汗ばんで寝苦しい。何か俺の身体を持ち上げようとしている。足の先からピリピリと痺れて来て――。

と思ったときは遅かった。全身が硬直して、針金かロープでぐるぐる巻きにされたような状態である。

「金縛りだ……」

初めてでも分かる。あれだけ一也に聞かされていたのだから。

正直なところ、怖いとは思わなかった。むしろ興味の方が先だ。

しかしそれも、俺が目を開けるまでのことだった。

薄っすらとまぶたを持ち上げてみると――ベッドの上に女の姿が浮かんでいる。若くて髪の毛の長い女だ。その髪にはウェーブがかかり、少し茶色っぽくもある。おまけに化粧までしていて、耳のピアスがキラリと光った。

女の口がゆっくり開いた。そして……。

「こんにちは！」

と、かわいい声で言ったのである。

「ギャー！」

縛りついた針金をぶち切るほどの叫び声を上げた俺は、いつの間にか金縛りから解放されて、ベッドの中で震えていたのだった……。

(一一)

仕事が終わって帰宅した俺は、マンションの前に集まっている人垣を見て、立ち止まった。制服姿の警察官も何人かいるようだ。

例の空き巣が捕まったのか？

ゆっくりと近づいて、様子をうかがってみる。

「あっ！」

という声が聞こえたと思うと、ざわついていた人々の動作が一斉に止まる。そして視線が俺に集中した。

みすばらしい格好をした知らないおじさんが近づいて来た。そして、チラッと黒い手帳を見せる。——そう、刑事さんなのだ。

「ちよつといいかね。話を聞きたいんだが」

捜査の協力をしろ、っていうのか。いいだろう。何でも訊いてくれ。

「空き巣のことでしょ。捕まったんですか？」

「君、昨日の夜——いや、夜中だな、午前二時ごろ、何をしていた？」

と、ぶっきらぼうに訊いてくる。

「夜中——ですか？ たぶん、寝ていたはずですが」

「たぶん？ 証明してくれる人はいるかね」

「そんなのいませんよ。夜中まで友達と飲んでたけど、あいつさつさと帰っちまったし」

「ちよつと一緒に来てくれないか。事情を訊きたいんでね」

いつの間にか、俺の両脇を警官が挟んでいる。「302号室に空き巣が入ったんだ。ちようどその時間、君の姿を見た、っていう人

がいてね」

わけが分からないまま、俺はパトカーに乗せられていた。やっぱりあの人だわ。何かやりそうな男だもの。あの顔がおかしいのよ。私なんて、パンツまで盗まれたわ。

そういったババアたちの声を背中に聞きながら、いつしか俺は連行されていたのだった……。

取調べというものが、こんなに複雑なものだとは知らなかった。怒鳴ったりなだめたり、おだてたり侮辱したり。

お茶を持って来たと思ったら、机を叩いてひっくり返し、俺のズボンが濡れてしまうシーンもあった。

「——だから、誰が見たんですか、俺の姿」

「マンシヨンの住人だよ。名前は言えないがね」

「そんな時間に見た人の方が怪しいんじゃないですか。だって夜中ですよ」

真夜中にうるうるする方がおかしい、ってもんじゃないのか？

「一人だけじゃない。それに、ブランドに干してある下着。盗んでいる現場を見た人がいるんだよ」

刑事は鼻で笑って、「婆さんの下着が、そんなに好きなのかね」と、言っただった。

トントン、と取調室のドアが鳴る。若い警官が顔を出すと、くそっただれ刑事が出て行った。

——待つこと数十分、戻ってきた刑事の顔がさつきと違う。気まぐすそうに笑みを浮かべ、しばらくもじもじしていたかと思うと……。

「西野君、申し訳ない！ 君は無実だ」

と、平身低頭にかしこまっている。

「あの、何か……」

「君のアリバイを証明する人が現われたんだ。——一緒にいたっていうじゃないか、女と。どうして最初っからそう言わなかった」

「あのう、僕……」

「きれいな子だね。今どき珍しいよ」

刑事はニコニコ笑いながら、「君の恋人かい？」  
と、訊いた。

「ええ、まあ……」

違うとは言えない。だってせっかく開放されるのだから、ここで正直になるのは得策ではないはずだ。

しかし、誰だ？　もしかしたら有里子が帰って来て、事情を聞いた上で助けに来てくれたのかもしれない。

何度も頭を下げた刑事は、丁重に俺を取調室から送り出した。

「彼女が下で待っているはずだ。早く行ってあげなさい」

「はあ——どうもお世話になりました」

怒鳴りつけてもいいはずなのに、なぜか俺は頭を下げている。

「しかし本当にいい子だ」

と、刑事は言った。「望美さんか……。いい名前だ。わしの初恋の女性と同じなんだよ」

望美？　俺の恋人は……。

「有里子じゃないんですか？」

「確かに望美と言ったよ。倉田望美、とね」

刑事の顔から笑みが消えた。「——君の恋人の名前、何というんだ？」

「いや——はは！　すみません。前の彼女と間違えちゃって……」

俺は慌てた。せっかく出られたというのに、後戻りはごめんだ。

「どこに惚れたんだよ。あの長い髪か。それとも、今はやりのミニスカートか？」

やはり有里子ではない。あいつはショートカットだし、スカートをはいた姿を見たことがない。

——玄関口まで降りてくると、刑事が立ち止まった。

どうやら有里子——ではない、望美の姿が見当たらないらしい。辺りをうろろ探していた刑事は、

「先に帰ったのかなあ……」

と言つて、また署内へと消えて行く。

どうでもいい。早く帰りたい。

俺は正面に停まっているタクシーに、ためらいなく飛び乗ったのだつた……。

## その二

もうすぐ日付が変わろうとしている。要するに深夜である。

執拗な取調べには閉口したが、あつけない結末に気が抜けたのも事実である。警察なんていい加減なものだ。

マンションの自室のドアにキーを差し込んだ俺は、もしかしたら——という期待が少なからずあった。

有里子が帰っているのでは、と思っていたのだ。

しかし、部屋の中は真っ暗。一也と飲んだ残骸がそのまま残っているというのは、なんとも淋しいものだ。

「——ただいま」

誰もいない部屋に、俺は声をかけた。

もちろん返事はない。やはり有里子ではなかったのだ……。

シャワーを浴びた俺は、そのままベッドに横になる。仕事疲れに加えて、慣れない取調べのせいで睡魔が襲っていた。

しかし興奮しているのか、身体は力が抜けていくが、頭の方は覚醒したままだ。

「そんな時、金縛りになるんだぜ」

と、坂藤一也が言っていたのを思い出す。

すると……。来た来た！ 案の定、足の前から痺れてくる。そして、身体が突っ張って、がんじがらめの状態になってしまった。——金縛りだ！

俺は目を開けなかった。それは昨日、見てはならない幽霊を目撃した恐怖感を、今もなお憶えていたからだ。

しばらくもがき苦しんだ。手足は動かないし、なにやら身体の上で飛び跳ねているような感覚さえある。

しかしこれは夢なんだ、幻なんだ！ と自分に言い聞かせ、やつこの思いで振りほどく。いつまでも続くわけがないから、解放され

た後は普通に眠れるだろう。

全身に感覚がよみがえった俺は、大きく息をついて、本格的に睡眠体勢に入る。そして、何気なくチラッと目を開けると……。

「良かったわね、釈放されて。あたし、心配してたのよ」

女が……女がこっちを向いている。

ゆ、幽霊！ いや、幻覚か……。

「どうしたの？ そんなに怖がらなくてもいいじゃない」

と、可愛い声で言っている。

俺の口はポカンと開いたまま、しばらく声が出なかった。

こいつは昨日、金縛りのときに見た女じゃ……。ウエーブのかかった茶髪に、耳のピアス。パッチリした眼に薄化粧が今風の女の子だ。どう見ても化け物ではない。

やっと俺は飛び起きた。

「誰だお前は！ どうやってこの部屋に入ってきた！」

「どうやって、って……」

俺が怒鳴ったせいか、女はしゅんとうなだれた。

「いつの間に入ってきた。——名前は？」

「あたし、倉田望美、二十一歳。身長157センチ、体重は秘密。バストは普通でブラのカップはB。ウエストは細めでヒップはブルン。それから血液型はA型で——」

「もういい！ 勝手に人の部屋に上がりこんでいいと思ってるのか」

「何よ、あなたのことが心配だったから出て来たんじゃないの。文句があるわけ」

「出て来た、って、幽霊じゃあるまいし、それにお前——」

俺の言葉が喉元でつまった。——倉田望美？ どこかで聞いた名前だぞ……。

そう、確か警察に俺のアリバイを証明しに来た女と同じ名前だ。

「お前、俺のこと知ってるのか」

「当たり前じゃないの。あなたがここに越して来たときから見てたんだから」

「見てた、って、どこから」

「どこにいたって分かるの」

自慢げにいった望美は、「だってあたし、幽霊なんだもん」

と言つて、へへつと笑つたのだつた。

俺は知らなかった。足が付いている幽霊が存在するというのもつとも幽霊が出て来ることだって……。

しかし俺は、もちろんその女の言うことを信じているわけではない。当たり前だろ。この世に幽霊なんて存在するはずがないじゃないか！

——おかしな女が迷い込んで来たもんだ。と、俺は心の中で呟いていた。

幽霊がこんなに酒豪だとは思わなかった。晩酌用にストックしておいた冷蔵庫のビールは飲み上げるし、来客用の洋酒だって開けたくはなかったのだ。

しかし望美の言い分では、

「幽霊は水を飲んじゃいけないの。だって仏壇にはお神酒を上げるでしょ。やっぱり酒よ。もつともあたし、ワインの方がよかったんだけどね」

今どきの幽霊というものの、やはり時代の流れに合わせているのだろうか。

俺と幽霊は、テーブルを挟んで、不思議なパーティーの真っ最中である。

「——あなたがいけないのよ。フラフラしてるから疑われる。そうじゃない？」

「いつ俺がフラフラした」

「三日前だったかしら。酔つて帰って来たとき、自分の部屋が分からずに、二階と三階、行ったり来たりしてたじゃない。あなたの部屋はここ、四階でしょ」

と、望美は言つて、一気にグラスを干してしまふ。

「——お前、どこで見てたんだ？」

言っていることが事実なだけに、俺がそう訊くのも不思議ではないはずだ。

「あの時、203号室の本橋さんが見てたのよ。あのおばさん、何でも人に言いふらすでしょ。ほんとにおしゃべりなんだから」

「だから、どこで見てたのか、って訊いてるだろ」

望美は俺の顔を見て、ちょっと小首をかしげた。

「天井の照明の横だったかしら。あそこ、まぶしくって……」

しばらく俺は、何も言わなかった。

どこまで信じていいのだろう。嘘をついているようには見えないし……。

「俺のアリバイを証言したの、お前か？」

「そうよ。他に誰がそんなこと言える？」

望美は得意げな顔で、「有里子さんがいなくなっただから、あたしがあなたを守ってあげないよね」

望美の表情が、ふっと陰った。楽しんでいたようにも思えたのに、悲しみをこらえるようにうつむいている。

有里子のことまで知っている。——俺はもう、追及することさえ忘れていた。

「有里子、どこに行っただのかな……」

俺は何気なく呟いた。望美なら、本当に知っているかもしれない、とちよっぴり思ったからだ。

「そうね……。彼女、迷っていると思うの」

「お前、知ってるのか？」

「そりゃ知ってるわよ、幽霊なんだから。でも、今は言えない」

「意地悪言つなよ。幽霊だったらどこにでも行けるんだろ。お前が行って、有里子を説得してくれたら——」

「勝手なこと言わないで！ 幽霊だって住むところは決まってるんだから。警察まで行くの、大変だったんだからね」

望美はため息をついた。

ふと、望美の表情に緊張が走った。辺りを見回して、じっと耳をそばだてている。

こんな顔は初めて見た。といっても、会ったことさえ今日が最初ではあるが。

「いる。——来てるよ、今日も」

押し殺した声で、望美が言った。

「どうした？ まさか有里子が——」

「早く行つて！ 203号室のベランダで、男がウロウロしてる！」

望美が俺の手を取った。——と思ったが、何の感触もなくその手をすり抜ける。まるで立体映像を見ているように、望美の白い手が俺の手を通り抜けてしまったのだ。

こいつ、本当に幽霊なのか……。

「犯人よ。早く——早く捕まえて！」

考えている暇はない。俺はベランダへと走った。

下を覗いて見る。マスクをかぶった男が、ベランダの柵に足をかけているところだった。

一瞬、男と目が合ったかと思うと、自然的に俺の声が響き渡る。

「こらっ、泥棒！」

驚いて植え込みに落ちた男は、ネズミが逃げて行くように茂みを揺らして消えて行った。あっという間の出来事だ。

表の通りが、やや騒がしくなっている。警察が張り込んでいたのだろう。

どうせその内捕まるさ。所詮、こそ泥なんだろうから。

「お前の言うとおり、泥棒だったみたいだ。でも、よく分かった——」

部屋に戻ってみたが、望美の姿はもうそこにはない。ダイニングへのドアは開いているし、トイレに入っているようでもない。

帰ったのか？ と思ったが、玄関のドアが開けばすぐに分かるはずだ。

ガラステーブルの上に、望美が飲みかけているグラスがそのまま

置かれたままだ。

「あいつ、本当に幽霊なのか？」  
俺はそう呟いていた……。

### その三

#### (三)

土曜日の夜の街というのは、どうしてこんなに若者が溢れて来るのだらう。どこかの店に行くわけでもなく、ただブラブラとしているだけだ。

そういう俺も、目的があって出て来たわけじゃないから、文句は言えないけどね。

「——そんなもんだよ、金縛りって」

居酒屋のカウンターで、坂藤一也が言った。

仕事の帰りの道、俺は一也に電話して、日頃の愚痴を聞いてもらうべく、いつもの店に誘ったのだった。

「でも、金縛りが解けてからなんだ、そいつが現われたの。幻覚なんかじゃない」

と、俺は断言した。

「だけど、消えちゃったんだろ？」

「ああ、確かにね。でも、グラスは二つ残ったままだったし、ブランドーは空になって……」

「そんなもんだよ。俺だって、グラスを二個置いて飲むことがある」それは寂しいからだらう！ 情けない。早く彼女でも作れよ！

恋人がいない一也は、金縛りの時だけ登場する幻の恋人と会うことだけが、唯一の楽しみなのだ。

もちろん本気ではないはずだが……。

「あんな、金縛りというものは——」

一也の言によると——身体が極度に疲労した状態のとき、人間の本能で肉体を休ませようとする。つまり睡眠である。神経を麻痺させ、全身の筋力を弛緩させる。力は抜けて、動いているのは肺呼吸の運動による胸の膨縮だけであらう。たまに寝返りを打つのは、身

体の底部になった場所へ血液が偏るのを防ぐため、右や左に体重を移動させている、というのだ。

また、それと反するように、脳は独自に休息を摂るという。もちろん日頃の生活では、就寝と共に睡眠状態に入る。脳も肉体も同時に、である。しかし時として、そのバランスが崩れることがあるらしい。

例えば、徹マンの後（もちろん徹夜マージャンのこと）そのまま仕事に行ったとしよう。身体は動いているのに、意識だけがどこかに飛んでいることがある。それは、脳だけが一瞬、眠ってしまったているのである。

「アチッ！」

突然、目の前でやきとりを焼いていたお兄さんが、フラツとしたと思うと、焼けた金網に手が触れて、大げさにのけ反った。

「すみません、お客さん。大丈夫ですか？」

こっちは何の影響もないのに、そうやって心配するのは、やはり商売人根性なのだろう……か？

こいつも徹マンか、と俺は思っていた。

話は戻って、今度は逆の場合である。

身体が眠って、脳が覚醒していた場合。実はこれが一番怖いのである。

ベッドに入って休もうとしても、なかなか寝付けない時がある。

でも身体はだるい。早く眠りたい、早くレムの状態に陥りたい……。思っても、寝苦しくて眠れない。

こんな時、脳よりも先に肉体が眠ってしまうことがある。とすれば、頭は起きているのだから、目が開いていたとすれば現実の世界を見ていることになる。しかし身体は睡眠状態だ。

ここに矛盾が生じる。自分の意思で、身体が動かないのだ。ちょっと難しく言えば、国会や内閣はフル稼働しているのに、国民が「毎日祝日状態」だとすると、その国は滅亡へといざなわれていくのである。

「もつと分かりやすく説明しろ！」

俺はつい、声が大きくなっていった。

「だから、夢なんだよ、お前が見ているものは」

一也は至って冷静だ。というより、呑気なだけかもしれないが。

「夢……というത്？」

眠っているとき夢を見る。もちろんそれは、眠りが浅いとき。熟睡しているときは夢など見る余地もないのだ。

つまり、金縛りというものは、肉体が眠っているから夢を見る。

しかし脳は覚醒しているから現実が見える。だから、現実の空間に夢の世界が現われるのである。実際に存在しないものが、まるでそこにあるかのように見えてしまうというのだ。

「ということは、あの女——望美っていったっけ、夢だっていうのか？」

と、俺は言った。

「それしか考えられない。だって消えたんだろ？」

「そりゃそうだけど……」

でも、望美が現われたとき、俺の肉体も脳も、明らかに起きている状態だったはずだ。

——一也の話は論文のように続いてしまったが、俺の中では、納得しがたいものが腹の底にたまっていた。

居酒屋を出た俺は、二次会に行こうという一也の誘いも断って、そそくさと家路に急いでしまう。もちろん理由なんかない。

ただ何となく、俺の部屋で、有里子が待っているような気がしていたんだ……。

タクシーから降りた俺は、マンションの入り口に立っている男を見て立ち止まった。

ここの住人ではないと分かってはいたが、その男はチラチラと俺を見ている。

関係ない。どこかの部屋に住んでいるオネーチャンの「パパ」な

のだろう。よくあることだ……。

「あの——ちよつと、いいですか？」

至ってまじめそうな中年男が、俺を呼び止めた。

「何ですか？ こんな夜中に勧誘なんて、やめてくださいよ」

最近、この手の危ないセールスが多くなっている。気をつけなきゃ……。

「203号室の本橋春代という女、ご存知ですか？」

「ああ、あの——」

あのババア、と言いかけて、「本橋さんですね。知ってますよ。

——それが？」

と、ふつうに訊いた。

「実は教えていたきたいんですが……」

男はしばらく考えてから、「あの部屋に、誰か若い男が通っている、ってことはありませんか？」

と、深刻な表情をしている。

「さてね……。ほとんどお付き合いはありませんから」

「そうでしょうね。——いや、申し訳ない。恥ずかしながら、あれは私の家内でした。三ヶ月前に逃げられて、ここに住むようになったんです。散々探し回って、やっと見つけたのはいいんですが、私と会ってくれようとはしません」

男は涙さえ浮かべていた。「離婚したいのなら判を押してくれればいいのに、それも拒否されて……」

「それは大変ですね」

同調しながらも、どうだっていい、と俺は考えていた。他人の離婚問題なんか知ったことか！

しかし男は、腹の底から怒りが湧いて来るらしい。

「私、殺されそうになったんです、若い男に。つまり女房のツバメなんです。もちろん事故を装ってあったんですが、私が死ねば、保険金がどっさり入ってきます。二人してそれを狙って……」

と、ついに男は泣き出してしまった。

かわいそうな人だ。同情するよ、男としてね。でも、他人夫婦のことは俺にはどうすることもできない。

「あの……だったら、警察に行った方がいいんじゃないですか？  
僕ではとても——」

「お願いです！ どうしてもあなたに協力していただきたい」

男は俺の両肩をつかむと、奮然として言った。

「でも、僕……」

「あなたじゃないとダメなんです。——たのむ、この通り！」

呆気にとられている俺の前で、男は土下座までしていたのだった……。

本当に頭に来るよ！ あの男——本橋春代の旦那と言っていたが、どこまで信じていいか分からない。

女房の男関係を、俺に調べてくれというのだ。しかも、夜中にこっそり、ベランダから侵入しろという。

冗談じゃない！ そんな泥棒の真似事なんかできるかってんだ。それ以上に頭に來たのが、俺を選んだ理由が、

「最近この辺りに出ている空き巣って、本当はあなたなんですよ？  
その腕を見込んで、証拠写真を撮って来てほしいのです」

というのである。「もちろん、お礼はたっぷりします。それに、あなたがこそ泥だということも喋りませんよ。絶対に」

ふざけるな！ 俺はこそ泥なんかじゃない！ 警察でも俺の無実  
は証明されたんだから。

もちろん、幽霊の偽証（？）ではあるが……。

部屋に帰った俺は、むしゃくしゃした気分のままシャワーを浴びると、一也と難しい話をしたために補給しきれなかったアルコールを補うべく、冷蔵庫から冷たい缶ビールを出した。

酔っているわけではないが、何となく眠くなってきた。  
ウトウトしながら、俺は呟いた。

「冗談じゃない。誰がスパイの真似事なんて……」

——一瞬、意識が飛んだ。いや、眠っていたのか？

「——やってあげなさいよ。啓介さんならできるわ」

女の声がして、俺は顔を上げると——いつの間にか、倉田望美が正面に座っていた。

不思議と、もう怖くはない。

「おお、いらつしやい。またまた出てきたね、幽霊ちゃん」

「幽霊ちゃんとは失礼ね。あたしにはちゃんと『望美』って名前があるでしょ！」

と言つて、俺に付き合うつもりなのか、冷蔵庫からビールを持ってくる、一気に飲み干した。

「まだ金縛りになってないぞ」

「分かってるわよ。あたし、あなたの幻覚じゃないんだからね」

「じゃ、何だ？」

俺は訊いてみたが、それは酷な質問かもしれない。望美もどう説明したらいいかわからない様子だ。

しばらく、沈黙の静かな時間が過ぎた。

「お前、聞いてたのか？ あのおっさんとの会話」

「うん、一階の郵便受けの中でね。だって、待ちきれなかったんだもん。啓介さんが帰ってくるの……」

望美はそう言つて、寂しそうにうつむいた。落とした視線はどこを見ているのか、缶ビールを持った指が、トントんと揺れている。

「お前、やってあげなさい、って言っただけ、どうして？」

「啓介さん、利用されようとしてる」

「だから、あのおっさんに、だろ？」

「まだ分かってないのね。あのおっさん——じゃない、おじさんは犠牲者なのよ。保険金目当てに殺されようとまでしてたんだから」

望美は憤然として、「あなたを犯人だって言つたの、あのババアでしょ。——ベランダから男が侵入しているところを、近所の人が見たの」

「だからそれが、こそ泥で——」

「こそ泥は確かにいるわ。でもね、あれはババアの恋人よ。それがバレそうになったから、こそ泥に仕立てるしかなかったの。でも恋人を突き出す気はないから、誰かを犯人にするしかなかったというわけ」

望美は一気にまくし立てた。

俺はその話を整理するのに、ちよつと時間がかかったが、  
「それで俺が……」

と、分かったような分からないような気分で言った。

「早くしないと、本当に犯人にされてしまうわ。警察はまだあなたのことを疑ってるし、あのババア、何を言つか分からない」

と言つて、望美は立ち上がった。

ためらっているのか、もじもじしている。

「どこか行くのか？」

「うん、ちよつと……」

出て行きかけた望美の手に、白い封筒が握られている。

玄関まで歩いて行くと、思い切ったように振り向いて、

「これ、郵便受けの中に入ってた」

と、その封筒を俺に差し出した。

宛名は俺だ。そして裏返してみると——そこには小さな丸っこい文字で、有里子 と差出人の名前が書いてある。

有里子からの手紙だ。あいつ、どこにいるんだろう……。

「お前、読んだのか、これ？」

「封は切つてないでしょ」

と言つて、望美は下を向いた。「でも、あたし幽霊だから、中まで見えちゃうんだよね」

足下にあるスチールのゴミ箱を蹴っているつもりなのだろうが、足は揺れているのにゴミ箱はそのままだ。

はさみで封を開けた俺は、五枚の便箋にびっしりと埋め尽くされた文字を見つめていた。

「あいつ、やっぱり……」

顔を上げると、そこにはもう、望美の姿はない。

幽霊のくせに生意気な奴だ！

自分が好きなきばかり出て来て、俺が話したいときに消えるなんて……。

俺は、ぬるくなったビールに、また口をつけた。

## その四

### (四)

パトカーの赤いランプが見えて来た。サイレンは聞こえない。マンションの前で一旦停まると、そのままゆっくり進み出る。要するにこそ泥が捕まるまで、この辺りは重要パトロール地帯なのである。

部屋の明かりを消して、ベランダの柵を乗り越える。そして静かに垂らしたロープに掴まって、震える足を何とか絡ませた。後は少しずつ降りて行くだけだ。

今日ばかりは、俺の高所恐怖症もなりを潜めてくれている。そうでなければ、二階からはしごを使っても降りられないのだ。

二階までたどり着くと、203号室のベランダにそっと足を踏み入れた。

カーテンは閉められているが、端の方にちよつとした隙間がある。俺はそっと目を寄せてみた……。

スモールランプがぼんやりと内部を浮かび上がらせ、盛り上がったベッドが見えた。

おそらくあのババアが、若い男と寝ているのである。俺はカメラのファインダーをサッシガラスに近づけると……。

「——来たわね。待ってたわ」

サッシが開いて、ババアこと本橋春代が顔を出した。「やっぱりあんただったのね、このこそ泥！」

突然のことに、俺はどうしていいか分からない。

「いや、俺は頼まれて——」

「頼まれて泥棒するのかい。いい度胸だよ」

と、春代は言って、「泥棒！ 泥棒！」

外に向かつて何度もそう叫んだ。

人のざわめきが聞こえたと思うと、早くもサイレンの音が鳴り響く。

あのおやじに騙された！———と思ったときだった。その部屋の奥にあるダイニングから、望美が必死の形相で俺を手招きしているではないか。

「早く、早く来て！」

入って行こうにも、春代が入り口をふさいでいる。すると、瞬間移動でもしたのか、いつの間にか俺と春代の間に望美が立っていた。「お巡りさん！ こっち！」

と叫んでいる春代には、望美の姿が見えていないのだろう。

「早く、男がいるわ。逃がしたらダメ。そうでないと、本当の犯人が出て来れないから」

と、望美が俺に言った。

「ベッドの中だろ」

「違う、あれは見せ掛けだけ。ほら、玄関から出ようとしてる」

と言ったが、ここから玄関は見えない。すると、望美が俺の腕をつかんだと思うと、勢いよく中へ引っ張り込んだ。

感触があつた。俺の手をギュツと握る望美の手の温もりが……。

制止するババアを振り切り、玄関まで駆けて行くと、若い男がドアを開けようとする瞬間だった。

「待て、こそ泥！」

泥棒ではないかもしれないのに、俺はそう言って近寄ろうとする。と、男は振り向きざまに陶器の置物を？んで投げようとした。

と——男の形相が歪んだ。そして、

「ギャー！ ば……化け物！」

と叫びながら、俺ではなく、望美に向かつて置物を投げつけたのだった。

陶器は望美を透り抜け、壁に当たって砕けた。

ドアを開けて逃げようとした男は、何かにぶつかってドアの中に

倒れこんだ。

そして……。

「もういい、そこまでだ」

あのおやじ——俺に盗撮を依頼した本橋勝が、ゆっくりと入って来た。

誰もが一瞬、動きを止める。

「君には迷惑をかけた。本当に申し訳ない」

本橋勝が、俺の肩に手をかける。

「何よ！ どうしてここにいろの？」

春代がうるたえて言った。

「茶番はやめろ。全部分かってるんだ」

「勝手に人のうちに入って来ないでよ。いくら離婚していないといつても、ここは私の部屋なのよ。それとも、泥棒でもしにきたの？」

「泥棒？ そのつもりで来てたよ、今まではね。しかしもう、何も盗むものはない」

「来てたよ、って——あなただったの、最近よく出る空き巣って」

「周りのことは知らないよ。でも、少なくともこの部屋に入っていたのは俺だ」

本橋はそう言って、キッチンの椅子に腰を下ろした。そして、うずくまって震えている若い男に目をやった。

「た……助けて……」

男は顔すら上げられないでいる。

「俺はお前を助けたいんだ」

と、妻の顔を見ていった。

本橋は悲しんでいるようである。いや、その表情は穏やかでもあった。

「私、あなたを裏切つてのよ」

「そうかもしれない。でも、お前はこの男に騙されていたんだ。——このまま離婚してもお前に財産は入らない。だから俺を失脚させて、離婚のネタにしようとしたんだろう」

「——あなた、知ってたの？」

「そんなことはどうでもいい。ただこの男は、うちの会社の重要書類が欲しかっただけだ。お前が俺の机から持ち出した薄っぺらい紙。こいつから頼まれたんだろうけど、残念ながら、すり替えさせてもらったよ。あれが本物だったら、この男は今ごろ重役になって、社長の娘と結婚することになっていたんだ」

と本橋が言うと、

「やっぱりあれは偽者だったのか！」

と、その男が顔を上げた。

「そんなことだと思っただわ。こんなおばさん、相手にするはずないものね」

と言つて、春代が近寄ろうとすると、

「く……来るな！ こっちに来るな！」

今度こそ本当に、若い男は卒倒してしまったのだった。

呆氣に取られていた本橋夫妻。

いくら魂胆が暴かれたからといって、お化け扱いされてはかなわない。

「あたしつて、そんなに怖いかしら……」

やはり俺にしか見えてないらしい。望美がババアの前に立って、男を睨んでいただけなのだ。

ということは、この男にも望美の姿が見えていたというのか？

望美は振り向いて、俺にウィンクしたのだった……。

どうしてこんなときに来るんだ？ しかも鍵が掛かっていなかったからといって、勝手に上がりこんでいたのだ。

「遠慮しないで飲めよ」

自分で買ってきたわけでもないのに、坂藤一也は俺の冷蔵庫から遠慮もなしにビールを出して来る。

「よくそんなに飲めるな」

「だって素面じゃ寝られないんだよ。俺んちに出て来る幽霊がさ、

最近エスカレートしてパンツの中まで手を入れて来るんだ」

「いいじゃないか、金払わなくていいんだから」

一也は、嘆いているようで、喜んでもいるようだ。

こいつが言っているのは、金縛り中の出来事である。と本人は言っているが、実のところはどうだろう……。

早く帰れよ——と、俺は思っていた。

やっと空き巣の疑いは晴れたし、あのババアもこのマンションから出て行くという。その後どうするのか、そこまで俺は感知しないたぶん、元のさやに収まるのだろうか。が、おそらく男癖は治らないんだろうな。

「さあ、次は日本酒でも——」

と言つて、一也が一升瓶に手を伸ばしたときだった。

股間にもぞもぞとした感触を覚えた一也は、まるでおしっこを我慢しているように、足をすばめてなにやら考えていた。

そして……。

「ごめん、やつぱり俺、帰る。ちょっと用事が……」

と、そそくさと帰って行ったのだった。

俺はおかしくて、声を上げて笑った。

「お前もよくやるよ！ 生きてたとき、そっちの商売やってたんじやないのか？」

一也の横に、望美が最初っから座っていたのである。

「失礼ね！ これでもあたし、処女だったんだからね」

「ほんとだよ。二十一で処女なんて、それこそ化け物じゃないか」

「何よ、処女に近かった、ってこと！」

望美は憮然として、日本酒をコップ酒で一氣にあおった。

「男より、酒か」

「まともな男がいなかっただけ。男つて、求めてくるのは身体だけなのよね」

「そうかなあ……。まあ、否定はできないけどね」

「でもね、今さら遅いけど——初めて男を好きになっちゃった」

と言って、望美は顔を赤らめた。  
もう酔ったのか？ 酒豪女が珍しい。

「誰だよ、それ。俺が何とか——」

と言ったものの、所詮相手は幽霊だ。

何となく気まずい雰囲気で、俺もつられてコップ酒。

「——でも、良かったじゃん。有里子さん、帰ってくるし」

そう、あの手紙に書いてあったのだ。

近所の噂で、俺が空き巣の犯人だと聞かされたのだ。しかもババアのパンツまで盗んでいるという変体扱いまでされて。

恥ずかしくて、友達のところ転がり込んでいたらしい。

それでも、やはり帰る場所は俺のところしかない。だから、すぐに戻るつもりだったけど、なかなかきつかけがつかめなかったらしい。

——俺の部屋に近づく、ハイヒールの靴音が聞こえてきた。

「ほら、待ってるわ。早く行ってあげなさい」

望美がそう言って立ち上がる。

同時に俺も立ち上がった。

玄関の呼び鈴が、まるで目覚まし時計のように鳴った。

ためらっている俺を後押しするように、望美が玄関まで進み出る。

そして、ドアを背にして、立ち止まった。

「ドアを開けたら、あなたは現実に戻る。——有里子さんを、幸せにしてあげてね」

望美の瞳から、大粒の涙がこぼれた。

「俺、お前が幽霊だなんて信じられない」

「幽霊はね、本当に人を愛したとき、その身体に血が通うの。不思議よね」

203号室のベランダで、俺の手を引っ張った望美の手の感触を思い出していた。

また呼び鈴が鳴った。有里子が待っている。

俺がドアのノブに手をかけようとしたときだった。

望美の唇が、俺の口をふさいだ。

こいつ、知っていたんだ。俺が「お帰り」と言おうとしていたことを。

それを阻止するかのように、柔らかい唇が俺に絡み付いてきた。

望美の想いが俺の中で広がる。まるで最後を惜しむように……。

——目を開けた俺は、誰もいなくなったドアの前で、ただ一人呆然と立ち尽くしていた。

そして、ゆっくりとドアのノブに手をかけた……。

おわり

#### その四（後書き）

拙作を読んでいただきましてありがとうございます。

この物語は「午前靈時シリーズ」の第一弾で、続編がいくつか書きあがっています。有里子が主役で進んでいくもの、坂藤一也が何者かに誘拐されるもの、そしていつか、倉田望美がなぜあの若さで死んでしまったのか、詳しく表現している作品もあります。

どうぞご一読下さい。順次UPしていきたいと思っております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1349q/>

---

午前靈時の夢物語

2011年1月21日15時10分発行